

月例研究会（2005年3月23日）

## 地方社会運動史研究の現状

——愛知県自治体史を中心に

梅田 俊英

現在、愛知県では『愛知県史』全60巻の編纂が進んでいる。私が同県史の調査員に任命されて編集委員会に加わっていることから、月例研究会で報告することとなった。

10数年前、荒川章二・大野節子・横関至・梅田の4人で地方社会労働運動史研究の現状の研究プロジェクトに取り組んだ。そのころには、神奈川県史・新潟県史など社会運動史にも目配りされた秀逸なものが刊行されつつあったために同プロジェクトを立ち上げた次第である。この研究の結果は『大原社会問題研究所雑誌』に発表され、本年3月ワーキングペーパーの形で刊行された。「平成の大合併」の進行とともに起きている新たな自治体史編纂のブームに資するためである。

愛知県の近代社会運動史研究には、斎藤勇氏らの先駆的業績はあるが、昭和戦前期全体の通史はまだ存在しない。『愛知県史』刊行によりその欠を埋めることになるだろう。

近代愛知の社会運動の源流となったのは、1920年創立の名古屋労働者協会である。これは名古屋新聞記者で社会主義者だった小林橘川

（戦後革新名古屋市長を務める）や作家になる葉山嘉樹など労働者によって設立された。

戦前愛知といえば、繊維と窯業が中心だった。そのため、名古屋・瀬戸・豊橋などが運動の中心地となる。組織では、官業の名古屋向上会、陶画工らの日本製陶労働同盟などが活発に活動した。これらは熟練工の組合でクラフトユニオンの特徴を持っていて、自己の利益を貫徹する姿勢が強かった。また、名古屋圏の社会運動には東京からも、関西からも独自性を持つとする傾向がみられ、たとえば、友愛会-総同盟の勢力が根付かず、左翼的傾向が強かったといえる。指導者には中間派左派にいた荒谷宗治、労農党候補者となる山崎常吉や明治社会主義者出身の鈴木楯夫らがいた。1923年には「名古屋共産党事件」が起こるように、共産党の勢力も比較的強かった。

近代愛知の社会運動ではプロレタリア文化運動も盛んだった。1929年には松原英治らにより新美術座が結成されている。翌年同座はプロレタリア劇場同盟に加盟し名古屋前衛座と改称している。また、30年代前半には作家同盟、美術家同盟、エスペラント同盟やプロ科支部なども活動した。

労働運動では、前述の陶画工のほか、海軍関連の機器を作っていた愛知時計の労働者などが根強く運動を展開している。

以上のように、近代愛知県において活発に社会運動が展開された。現在、その全貌は明瞭とはいえないが、前記『愛知県史』編纂活動の中で少しずつ明らかになるであろう。

（うめだ・としひで 大原社会問題研究所兼任研究員）